

2 課題評価結果報告（概要版）

試験研究機関名	対象課題数 (内訳)	区分	研究課題名	研究内容	研究期間 (年度)	総合評価結果
衛生研究所	6 課題 (事前評価 4) (中間評価 1) (事後評価 1)	事前 ①	特定健診・保健指導下での個人及び集団アプローチの再構築とその評価	①反メタボキャンペーン・特定健診は肥満者を減らしたか？②未受診者対策は受診者を増やすか？③早食いは、肥満・メタボにつながるか？の検証を行う。	24～25	採択した方がよい
		事前 ②	クロコウジカビ及びその近縁種の安全性の評価	食品工業上有用であり、かつ食品事故の原因でもあるいわゆるクロコウジカビについて、生産から食品に至る広範囲の菌を対象とし、カビ毒産生性と分子遺伝学的解析により、その安全性について検討する。	24	採択した方がよい
		事前 ③	医薬品の定量法における粉碎方法の影響について	医薬品の錠剤の定量法において、粉碎操作を行い、錠剤を粉末とする方法が一般的に用いられているが、その粉碎方法の違いが定量結果にどのような影響を及ぼすか、いくつかの粉末方法を試し調査する。	24～25	採択した方がよい
		事前 ④	千葉県内の温泉水におけるレジオネラ属菌に対する有効な殺菌剤の検討とそれに伴う温泉の泉質変化の調査	さまざまな泉質を有する温泉水について、レジオネラ属菌に対する具体的な殺菌方法が十分に検討されていない。そこで、有効な殺菌剤の検討を行うとともに、殺菌剤投与後の泉質の変化を調査する。	24～25	採択した方がよい
		中間 ①	県内温泉掘削井(大深度掘削含む)の泉質及び化学成分に関する経年変動調査	県内の各地区から掘削深度、泉質等を考慮したうえで定点となる施設を選定し、定期的な調査を実施することにより、温泉成分の変動状況を早期に把握し、温泉行政に反映させる。	20～24	継続した方がよい
		事後 ①	Campylobacter属菌およびその類縁菌の千葉県における人の感染状況と分離菌の解析	Campylobacter類縁菌の検査方法を確立し散発下痢症患者、集団下痢症患者、敗血症患者における感染状況を調べ、患者との関連を調査し病原性を検討した。また分離菌を解析し疫学的検討、より簡便な検査法の検討及び治療への応用の検討を行った。	20～22	計画どおりの成果が得られた
		主な 指摘・ 所見	事後評価①では「今後、他の研究者と情報の共有を促進し、全国各地で正確な菌の検出が出来るようになり、ひいては日本全体のCampylobacter属菌及びその類縁菌のサーベイランスにつなげてほしい」などの所見がなされている。			

試験研究機関名	対象課題数 (内訳)	区分	研究課題名	研究内容	研究機関 (年度)	総合評価結果
環境研究センター	4 課題 (事前評価 2) (中間評価 1) (事後評価 1)	事前 ①	微小粒子状物質 (PM2.5) 対策検討調査	千葉県における微小粒子状物質 (PM2.5) に係る環境実態、発生源の状況及び各発生源の寄与率等を調査、解明して、その対策の方向性を検討する。	24~28	採択した方がよい
		事前 ②	強震時の液状化・流動化現象と地質構造に関する研究	今回の地震動による液状化被害との関連が深いと考えられる人工地層の深部及びその下位にある沖積層の地質構造等の検討を行い、液状化予測精度の向上と効果的な対策に向けた資料とする。	24~25	採択した方がよい
		中間 ①	航空機騒音の評価法に関する調査研究	航空機騒音に係る新環境基準が平成25年に施行されることから、新環境基準の測定方法に基づく航空機騒音データを収集・解析し、測定・評価上の課題を取りまとめるとともに、より体感にあう評価方法について検討し、航空機騒音の低減に向けた研究を行っている。	20~24	継続した方がよい
		事後 ①	湖沼及び海域の水質及びプランクトン優占種の長期変動とその要因に関する研究	湖沼や海域(閉鎖性水域)の水質と関係の深いプランクトン発生機構の解明及び水質改善の資料とする為、植物プランクトン優占種の長期変動を水質鉛直分布、平面分布の変動と併せて整理、概観し、考察した。	20~22	計画どおりの成果が得られた
		主な 指摘・ 所見	事前評価②では「地震による液状化被害を続けて被った千葉県としては、今後の被害防止のため、本研究を積極的に推進すべきである」などの所見がなされている。			
産業支援技術研究所	3 課題 (事前評価1) (中間評価1) (事後評価1)	事前 ①	室内照明で機能する光触媒の研究	浄化機器等への利用を目指し、太陽光や室内照明に多く含まれる可視光に応答する光触媒の開発を行う。	24~25	採択した方がよい
		中間 ①	持続可能な循環社会に向けたプラスチック複合材料の開発	千葉県のバイオマス資源と石油由来のプラスチックを複合させた環境負荷に配慮した機能性材料の開発とその実用化を図る。また、炭素繊維強化プラスチックについて損傷挙動を把握し、その構造部材の安全性や信頼性を評価する技法の確立を目指す。	22~24	継続した方がよい
		事後 ①	放電プラズマ焼結法を用いた安価な金属と酸化チタンによる複合光触媒の開発	酸化チタン光触媒の機能の高度化を目指し、安価な金属と酸化チタン光触媒の複合化を試みた。	21~22	計画どおりの成果が得られた
		主な 指摘・ 所見	中間評価①では「本研究は、資源の有効活用につながり、技術移転も十分見込まれることから、研究の方向を見極めながら、確実に実行してもらいたい」などの所見がなされている。			

試験研究機関名	対象課題数 (内訳)	区分	研究課題名	研究内容	研究期間 (年度)	総合評価結果
農林総合研究センター	3 課題 (事前評価 1) (事後評価 2)	事前 ①	低濃度エタノール土壌還元消毒法の実用化と実証	低濃度エタノール土壌還元消毒法の実用化と実証をトマト及びメロンを対象として実施し、これらの主要土壌病害虫に対する本消毒法を確立する。	24～26	採択した方がよい
		事後 ①	バイオマス資源の活用技術の確立	都市部の産地を中心に焼却処分が困難となっているナシ剪定枝を対象に、剪定枝の発生量を削減する栽培技術、堆肥化及び炭素化等の再資源化技術、再資源化物のナシ幼木に対する施用技術の開発を行った。また、先行して実施した研究事業からの継続課題であるトマト残さの処理法及び家畜ふん炭化物施用法の開発を行った。	18～22	計画どおりの成果が得られた
		事後 ②	スギ若齢林の間伐による花粉飛散抑制技術の確立	花粉の少ないスギ約2,000本を対象に、個体別の着花量を4年間にわたり調査し、雄花の着生状況を明らかにした。この結果に基づき、着花性が高い個体の判別方法、間伐量を明らかにし、花粉飛散量をより減少させる技術を開発した。	19～22	計画どおりの成果が得られた
		主な 指摘・ 所見	事後評価②では「本研究成果を活用するには補助金を含め行政との連携が必要であり、施策として実施可能な伐採法を確立してほしい」などの所見がなされている。			
畜産総合研究センター	3 課題 (事前評価 1) (事後評価 2)	事前 ①	畜産排水の窒素低減化処理技術の確立	水質汚濁防止法の排水基準の見直し（硝酸性窒素類の規制強化）にあたり、畜産を含む事業所から排出される汚水については、簡易で実用的な処理技術として、硫黄脱窒技術を活用して、既存の施設に追加して処理するシステムを確立、実証を行う。	24～26	採択した方がよい
		事後 ①	飼料作物の収穫調製における細断型ロールベールサイレージ方式の導入条件と定着要因の解明	細断型機の導入を検討する際の見直しとなるよう、細断型機を効率的に運用できる収穫方式を検討するとともに、細断型機体系におけるトウモロコシサイレージの生産費を明らかにした。	21～22	計画どおりの成果が得られた
		事後 ②	自給飼料の効率的な給与に基づく優良後継牛生産のための育成管理技術の開発	自給粗飼料の多給管理が乳用育成牛の発育、第一胃機能、消化機能に及ぼす影響を解明するとともに、粗飼料多給により育成された牛の初産分娩後の生産性等について解析を行い、自給粗飼料の多給により輸入穀類に依存しない早期育成のための栄養管理技術を確立した。	18～22	計画どおりの成果が得られた
		主な 指摘・ 所見	事前評価①では「低コストで簡易な技術が開発されれば、環境浄化が図れるとともに、畜産とくに本処理技術の利用性が高い養豚農家の経営安定化に寄与できる」などの所見がなされている。			
水産総合研究センター	2 課題 (中間評価 1) (事後評価 1)	中間 ①	ゴマサバの生食用冷凍加工技術の開発	ゴマサバを原料とした高付加価値の新規加工品開発として、生食用冷凍加工品を開発している。	22～25	継続した方がよい
		事後 ①	秋季三番瀬におけるノリ生育不良と漁場環境の関係解明	三番瀬漁場における秋季のノリ生産の安定化に資するため、同海域におけるノリの生育不良と水温や流れなどの環境条件との関係及び沖合底層の高温水の有無が生産に与える影響を明らかにした。	20～22	計画どおりの成果が得られた
		主な 指摘・ 所見	事後評価①では「年末の海苔の生育不良の原因が高水温であることが明らかになり、他の湾内漁場への応用も可能な成果を得た。今後はこの成果を生かすために赤潮で行われているような予報や一時避難の方法等の研究を引き続き行うことが望まれる」などの指摘がなされている。			

試験研究機関名	対象課題数 (内訳)	区分	研究課題名	研究内容	研究期間 (年度)	総合評価結果
がんセンター(研究局)	10 課題 (事前評価2) (中間評価7) (事後評価1)	事前①	創薬研究基盤形成とゲノム化学を利用した遺伝子制御システムの開発	ゲノムDNAを認識する化合物を自動的に合成するシステムを企業と合同で開発し、県がんセンター研究局に設置する。この合成機を用い、遺伝子解析の研究成果に基づいてくすりの候補を合成してがん治療薬を開発する。	23~27	採択した方がよい
		事前②	発がん機構の解明、がん治療へ向けたマウスモデルを用いた基盤研究	遺伝子改変マウス、野生マウス等のヒトがんマウスモデルを用いて、がんの発生、進展に関わる遺伝子群の道程を目指す。	23~27	採択した方がよい
		中間①	細胞性免疫治療と遺伝子治療の基盤研究と臨床応用	細胞傷害活性を有するアデノウイルス等による直接的な腫瘍局所の破壊と、その過程で誘導される抗腫瘍免疫応答を効果的に利用し、最終的には遠隔転移巣をも標的とする複合的な治療法の開発を指向した研究を行っている。	10~26	継続した方がよい
		中間②	細胞増殖・細胞死制御の分子機構解析とその幹細胞研究への展開による臨床応用	がん細胞の細胞増殖・細胞死制御に関わるメカニズムを研究し、これらに關与する遺伝子・がん抑制遺伝子産物のがん細胞または正常細胞内での機能や役割を明らかにし、これによってがんの難治化・再発に關与するがん幹細胞に対する新たな治療法の開発等を行っている。	18~24	継続した方がよい
		中間③	がん診療専門施設における医療の評価と生存率等の公表に関する研究	精度の高いがん統計の公表を通じて、都道府県のがん対策推進基本計画に資する情報を提供するのみならず、がん医療を受ける患者の手に届け、受療の道標を示す。またより長期の10年生存率算定の為に1998年診断症例の予後を収集し、長期生存指標を集計していく。	23~25	継続した方がよい
		中間④	ゲノム・エピゲノム異常を指標とした新規癌関連遺伝子の機能解析とそのゲノム創薬への応用	がんは、増幅・欠失などのゲノム異常とDNAメチル化などのエピゲノム異常の両者が蓄積して発症・進展する。そこで、ゲノム・エピゲノム異常を指標として診断や薬剤感受性予測を行い患者さんに還元し、さらに、より有用な新規の分子マーカーの探索を行っている。	21~25	継続した方がよい
		中間⑤	がん組織由来新規がん関連遺伝子の機能解析とそのゲノム創薬への展開	難治性のがんの多くはゲノムや遺伝子レベルで重篤な異常を有しているものが多く、そのような重要分子を標的とする治療薬の開発が必要であることから、仮説に基づいた神経芽腫の発がん研究から標的となるドライバー遺伝子を同定し、計画的に独自の創薬戦略を立ててきた。	11~25	継続した方がよい
		中間⑥	DNA損傷修復と制癌剤耐性獲得機構の分子生物学的研究及びその臨床応用	抗癌剤感受性を決定する役割を担うがん抑制蛋白質であるp53ファミリーに着目し、そのDNA損傷に応答した活性化機構の解析を介して、抗癌剤耐性獲得という現象の原因を探索するとともに、その克服を可能にする手法の開発研究を推進している。	10~23	継続した方がよい
		中間⑦	がんのゲノム異常及び遺伝子発現の網羅的解析とその臨床応用	DNAチップ解析等によるがんのゲノム異常及び遺伝子発現の網羅的な解析により、がんの発生、進展に關与する重要な遺伝子の同定とがんの性質と強く相関するゲノム異常や遺伝子発現パターンを用いた診断法やリスク分類法の開発を行っている。	10~27	継続した方がよい
		事後①	発がんとがんの進展に関わる個体発生関連遺伝子の同定および遺伝子改変マウスを用いた機能解析	遺伝子改変マウスを用いて、研究成果を蓄積している神経芽腫に関わる候補遺伝子群について機能解析を行い、がん発生、進展および、神経細胞、神経幹細胞に関する生理的な役割を明らかにするものである。遺伝子改変マウスの作製については当初の目標を完了することができた。	18~22	計画どおりの成果が得られた
	主な指摘・所見	事前評価①では「興味深い研究である。ハイリスク、ハイリターンであるが、研究を実施する十分な裏付けがある」などの所見がなされている。				